
オルレアン家の天災

トパーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オルレアン家の天災

【Nコード】

N8207T

【作者名】

トパーズ

【あらすじ】

ゼロ魔の世界に転生したが、転生先はまさかのオルレアン家。そんな彼が生き残る為、そして刺激的な毎日を楽しむ為に日々努力する……多分。

この小説はオリ主最強ものですのでそういった小説が嫌いな方はお気をつけください。

ブローグ

俺は死んだ。

ある日車に引かれあっさり死んだ。

俺は特に人生に未練などなかったので、引かれる瞬間何も思わなかったし、走馬灯を見ることがなかった。

唯一飯に未練があるとすれば…

パソコンのデータ消したかった…

「あー、もう一度いつてくれませんか？」

「だから人生やり直させてやる」

死んだはずの俺は今自称神のオッサンと何故か対面している

「状況が理解できねえ…！」

だって、ねえ？いきなり人生やり直させてやるなんて言われても…

「なんでやり直させてくれるのか教えてくれませんか？」

「よかるう…」

暇潰しだ」

「暇潰しかよ！」

思わずツッコミしてしまったわ！

「なんか不幸にしてそうなやつがいたんで転生させてやる事にしたんだよ。そういうやつなら断らないだろうし。まあ暇を持て余した神々の遊びというやつだ」

モン○ターエンジ○かよ！

「そうそれ」

「心読むなよ！」

ハア… なんか疲れる

「何が疲れるだ。あと敬語はどうした」

あんたに敬語使うの馬鹿らしいわ！

「というわけで転生してもらう」

「突然話を変えるな！」

ああマジ疲れる…

「まあいいや…？で？転生ってなんか小説とか漫画の世界でもいいの？」

「ああ」

よつしゃああああ！実はssとか読んで懂れてたんだよね

「では、どこの世界に転生したい？」

「ゼロ魔の世界でよろしく！」

え？理由？そんなの貴族になって楽しみたいからさ！

「そんな理由か…」
す

悪いかよ！別にいいじゃねえか！

「まあよい。では何か欲しい能力とかあるかね？」

「うーん…貴族に生まれてイケメンならなんでもいいよ」

「あそこはそんなんでは生き残れないぞ」

そ、そうなのか…危険な世界だな…

「じゃあ一方通行の能力で」

あれならまず死なないだろう

「無理だ」

「ハア？なんで？」

無理なのかよ！

「与えられる能力はその世界にあったものだけなのだよ」

なにそれ！？そうなの！？

「えー…じゃあどんな能力があんの？ゼロ魔の世界にあった能力って」

「色々だ」

答えになってねえ…

「

あーもうなんかオススメ的なのないんですか？」

「うーん…精霊に無条件で好かれ従える事ができる能力なんかはどうかね？」

おつと？なかなかよさそうな能力じゃないか

「具体的にどんなことができるんだ？」

「精霊に好かれ従える事ができる」

「…」

こいつにまともな答えを期待したのがバカだった…

「まあいいや…その能力でいいです」

「おお！そうか！では転生させるぞ。心配するな役に立つ能力だし貴族に転生させる…もちろん今のお前よりもいい顔にしてやる」

よっしゃああああ！なんか俺の顔がカスみたいな言い方だがまあいいだろう。転生させてくれるんだし

「それでは転生させる」

その瞬間俺の意識は途絶えた…

プロローグ（後書き）

誤字脱字感想等ありましたらよろしくお願いします。

魔法初使用（前書き）

スマホからだと投稿するのが難しいです…

魔法初使用

こんにちは…マルセイユ・ジョルジュ・オルレアン5才です…

ええ…まさかのオルレアン家へ転生してしまいましたよ…ハア…この五年間は屈辱の連続だったし（何があつたかは想像できるだろ？赤ん坊の頃はマジ最悪だった）まあ、そんな感じで今の今まで退屈してたわけだが今日から退屈からおさらばだぜ！

ん？なんでかつて？魔法を教えてもらえるからさ。

いやーホントに楽しみにしてたんだよね。今まではやれるとしたら魔法に関する本を読むくらいだし、体を鍛えたりは成長に影響がでそうでやれなかったし。

だがついに…ついに…！

魔法を練習させてもらえるのだ！

というわけでまずは杖との契約かららしい。

そして驚くことに杖との契約から魔法が使えるようになるまでは父上…つまりオルレアン公シャルルが教えてくれるのだ。

息子が魔法を初めて使う瞬間に立ち会いたいらしい…

「マルセイユ。まずは杖との契約からだ。杖をもって集中して呪文を唱えたりするんだ。初めは失敗ばかりだけど、そのうち杖が自分の身体の一部のように思えてくるから、そうなれば杖との契約は完

了だ」

「はい、父上」

さて集中集中…

………

ムリダナ（・×・）

全く何にも感じないんだ…

…っていかんいかん！一瞬エイラになってしまったわ！

「父上…できません！」

「そう簡単にはいかないさ。契約は何日もかけて行うものなんだよ」

ハア…だよなあ…面倒だなあ…だがこれができなきゃ魔法は使えないのだ！

集中集中…

結局契約には2日かかりました…でもまあ父上が3日かかったと言っていたから多分相当はやいほうだろう。

契約完了…つまり魔法を使えるということ…

ついにこの時がきた！

「マルセイユ、まずはコモンマジックからだ」

「わかりました」

や、やばい！緊張してきた！だって魔法だぞ！？あの魔法なんだぞ！？緊張ぐらいするだろう！

「ではまずは見本を見せるから真似してみてね。ライト」

おお！マジで光つとる！ぴかーって光つとる！

個人的にはレビテーションを教わりたかったが、あれはなんかコモンマジックじゃないらしいからね

「それじゃマルセイユもやってごらん？」

よし！確か魔法はイメージが大事だったな。

光るものと言えばそうだな…は！蛍がいるじゃないか！あれはライトのイメージにぴったりだ！

「ライト…！」

俺が呪文を唱えると杖の先が光った。

せ、成功だ！俺はついに魔法を使ったぞ！

「一回目で成功するとは…流石はぼくの息子だ」

えへへ。

照れるなあまったく。

「さて次は系統を調べるよ」

よしきた！系統魔法をついに使えるのか！

「ではまず水系統の魔法からだ。母さんが水系統だし、父さんはどの系統も等しく使えるから多分マルセイユは水系統になるんじゃないかな？」

ど、どの系統も等しく使えるだなんてズルい！

でももしかしたら息子である俺にも全系統の才能が…？

「まずは見本を見せるよ。コンディセーション」

すると父上の持つ杖の先に人間の頭ほどの水が現れた

「おお」

「マルセイユもやってごらん？」

よし成功させたる！

「コンディセーション！！！」

！

杖の先に俺の全身を包めるほどの大きさの水が現れた

え！？何！？もしかして俺天才！？父上もビックリしてるし

「す、すごいよマルセイユ！父さんだって最初はここまではできなかったよ！」

なんと！まさか父上を越える事ができちゃったりするのか？

「それじゃ…次は…」

結局父上の様に全て等しく才能があるわけではなかった。

水に関していえば確実に父上を越えた才能があるっぽいけどそれ以外は不明だ。努力次第かな？

とりあえず簡単に説明すると…

水系統>>>(越えられない壁)>>>風系統||土系統>>>(越えられそうな感じがしなくもない壁)>>>火系統

といったかんじかな？

まあ、父上とはちがい特化型だってことかな？なにせよ才能があ

るだけいいだろう。

明日から魔法の修行だな…

さて、今日は部屋に戻ってゆっくりしようかな、精神力回復させないといけないし…

じゃ、またね。

え？能力はどうしたって？

能力ってなに？え？

…

そんなものあったな…ついでに明日あたり試してみるか…魔法のふりして…

こうして私ことマルセイユ・オルレアンは魔法を使えるようになりました。

ちゃんちゃん（笑）

能力初使用 and 決意表明

やあ、マルセイユだよ。

魔法を教えてもらって一週間、ようやく一人で練習させてもらえるようになりましたよ。

そつ…今までは危ないからと一人じゃ練習させてもらえなかったのだ。

駄菓子菓子。

じゃなかった。

だがしかし、この一週間、俺は一度も失敗せずに魔法を使いこれなら大丈夫だろうと家庭教師のフランソワ（27）に思わせる為に努力を重ねたのだ。

フランソワはそこまで仕事熱心な奴でもなかったしな。ちよろかつたぜww

というわけで能力を試したいと思います。

正直能力など別にいらないのだが、せっかくもらったのだし一応使えるようになっておこうと思う。

よし、では精霊を従える力とやらを試そうと思う。

…

… なるにも起こらない。

いったいどういうことだ！何が起きたというのだ！まったくもう…
あ、何も起こってないんだったorz

よくよく考えたら使い方知らないじゃないか！どうしろというんだ！

「すうーはあー…すうーはあー（深呼吸）」

よし、落ち着いたぞ。

神もきちんとそこらへんは考えてくれたのだろう。何か方法があるはずだ。

とりあえず簡単なのからなんか試してみよう。指パッチンとか。

パッチン

…

… 何も起こらない。

まあ、そんなこったろうと思いましたがよ。ええ、そうですねとも。

と、その時突然俺は閃いた。

そう、閃いてしまったのである。

魔法と同じでイメージ的なのが大切なんじゃないかと…

結果から言おう。

成功しました。

なんか強くイメージしながら指パツチンしたり指をくいくいつてやったら成功した。

風は吹くし地面は割れるし木は動くし…

先住魔法のように詠唱もいらなんて…チートすぎる！しかも精神力とかもいらなんだぜ？

これじゃ系統魔法使える意味ないじゃん…

あーあ、どうせなら魔法とかぶらない能力くれればよかったのになあ…

神さまの馬鹿ー！

数日後

まあ、とりあえず最近は魔法だけでなく能力の練習もしております。

そしてわかったのだが一部の魔法は能力では再現できないことがわかった。

たとえば錬金とかはできなかった。

おそらくこの能力は風やら水やら自然の精霊が宿ってるものを操れるっぽい、あまり複雑なことはできないっぽい

操って攻撃したりはできるが補助的ななんか効果とかあるようなのは出来ないと言うことだね。

別に気にしてないけどね。

そこまでできたら魔法を使える意味がない。

ま、なにせよ能力は魔法が使えない状況になった時ぐらいしか使わないだろ。多分。

さて、今日も騒ぎまくったし、部屋にもどるか。てかさろそる母上が心配して探しに来そうだ。

まったく…過保護だぜ。

…

…あれ？

なんが大事な事忘れてる気がする…

一番大事な事、それも転生して一番最初に考えたような…

あ、

父上暗殺されるやん。

…

こんな事してる場合じゃねえ！さっさと対策練らないと！

だがこんなガキにできることなどまずない。だが何もしないというのは不味い。

やはり修行しかないか…

父上暗殺まではまだ時間がある、それまでにスクウェアにはなりた
い。

できるかな…？

俺ならできるはずだ！てかもうスクウェアになるんだ！決定事項だ
よ！絶対なる！

そんなこんなで俺の修行の日々が始まった…

能力初使用 a n d 決意表明（後書き）

決意表明…なのかな？

仲直り大作戦（笑）（前書き）

誤字脱字多そうです…

仲直り大作戦（笑）

こんにちは！マルセイユ・オルレアン9歳です。

あの決意表明？から4年がたった。

そしてこの4年間で俺はトライアングルになった。

そう、トライアングルになったのである。しかし…

父上暗殺阻止の方法がまだ思いつかないorz

昔読んだSSとかでやって

た方法なんかは俺には実現不可能だし…

そろそろ動かないとまずいよな！。まだ本格的にシャルル派とかジョセフ派とかになってないからいいけどなったら面倒だからね。

そんなわけで動こうと思います。

今までの俺なら自分一人で行動していました。

だがしかし、先日とある小説を読み仲間の大切さを知った俺はある案を思い付いた。

イザベラに相談しよう。

話は変わるがイザベラとシャルロットは原作ほどは仲がわるくない。

まあ、仲がいいというわけでもないが…

その理由は簡単、イザベラが原作よりも魔法が使えるからだ。

その理由はもつと簡単、俺が教えた。

同じ水系統として実演してイメージしやすくしたり、どんな感覚で使うといいか教えたりした。

そしたらある程度できるようになった。

もともと才能がないわけじゃなかったんだと思う。

王族だし。

他の王族みたいにたいした努力もせずに魔法が使えるなんて事がないだけで、決して才能ないわけではない。

努力したらできた。

本当によかったよ魔法が使えるようになって。

かわいい従妹に嫌われるとか死にたくなっちゃうよマジで！

「ごほん！」

さて、話を戻そう。

こういうときは俺と同年ながら俺より圧倒的に頭の良いイザベラ

に頼るのがベストだと思う。

てなわけでイザベラに手紙を書いた。

数日後

イザベラから俺の書いた、大事な話があるという内容の手紙の返事がきた。プチトロワで待ってるってさ。

というわけで出発だ。

父上にもイザベラのところ行ってくるというたら簡単にOKがもらえた。

…最近息子の扱い酷くありません？

シャルロットが可愛いのはわかるけど…

あなたの息子は寂しがつてますよー（笑）

冗談はさておき出発するでしょう。

フライでは疲れるので能力で飛びます。

こういう時には役立つ能力だ。

「マルセイユ。行っきまーすー!!」

プチトロワなう

「で？大事な話って何？」

イザベラに相談しにきたのはいいけどなんて話したものか…という
かイザベラの顔が少し赤い気がするけど風邪かな？それとも気のせ
いかな？

「大事な話というかなんというか…この話は俺達の人生にも大きく
関わるからきちんと聞いて欲しい」

「じ、人生って…私達にはまだはやいと思うけどマルセイユがその
気なら…ゴニョゴニョゴニョ…」

？

イザベラがなんかもじもじしながら言ってるけど…まあいいか。

「実は…」

「じ、実は??」

「…そんなに緊張されると話にくいんだけど…」

今までの話で特に緊張するようなのあったかな？あーあれか、人生
に関わるとか言ったのがまずかったか。

「実は…」

「…（ゴクリ）」

「父上と叔父上について相談があるのだが…」

するとイザベラがズデッ！！ってかんじでこけた。

？

なぜに？

「マルセイユの馬鹿！！期待しちゃったじゃない！！」

「え？何を期待してたの？」

「なんでもないわよ！！もう！！」

何を怒ってるんだ？

このあとイザベラをなだめるのに一時間かった。

「なるほどね」

ふー。イザベラに父上と叔父上が仲が最近悪いんじゃないか？という話をしました。

こういうの慣れてないから緊張したね。

「つまりマルセイユはなんとか父上と叔父上に仲直りしてもらいたいのね？」

「うーん…まあそんな感じ」

実際仲が悪いわけではないと思うけど…お互いに劣等感を感じてるからそこんところわかりあってももらえたらなー的な。

「何かいい案ないかな？」

「うーん…」

さすがのイザベラも思い付かないみたいだな…もはや父上暗殺阻止は不可能なのか…

「やっぱないよ」「あるわ」…あるの!？」

マジで!？

「ぜひ教えて下さいイザベラ様!！」

俺は今までの人生でもトップ3に入る土下座をかました。

「べ、別にいいけど」

「ありがとう!!!」

さすがイザベラだあ！俺もイザベラみたいな超天才的頭脳が欲しい！！

「ごほん！…これで仲直りするかどうかはわからないけど…お祖父様に頼るのはどうかしら？」

…

「今なんと？」

「だから！お祖父様に頼るの！」

あのジジイに頼るのか。

「あなたが心配してるのは父上と叔父上が王位をめぐって争うことでしょう？」

「え！？なんでわかったの！？」

ま、まさかイザベラ…読心術でも使えるのか！

「はあ…あなたは仲違いしてる人を見ても仲直りさせようとするよ
うな人じゃないでしょう？」

まあ…そうだね…

「ではなぜ二人を仲直りさせようというのか…簡単よ、将来王位を
めぐって内戦でも起きたりした時、自分に危害が及ぶのが嫌なん
でしょ？」

oh… 凶星DEASH

「やっぱりね… だったらお祖父様に頼んで話し合いの場でも設けてもらえば案外解決するんじゃない？」

！

「イザベラ… 君は天才だ」

「普通に考えれば誰でも思い付くんじゃない？」

「いや… 俺なんか四年も考えて思い付いたのがスクウェアになって父上にギアスでもかけて王位を諦めてもらうつていう案だけだぜ？」

「… あなたって馬鹿なのか天才なのかよくわかんないわね」

天才なわけないだろう！

「まあいい… ではお祖父様のところへ行こう」

「え？ 今から？」

「当たり前じゃないか」

「ちょっとマルセイユ！ 待って！」

「こちらスネーク」なにしてるの？」「…」

何って決まってるだろう。ばれないように段ボールをかぶって移動しているんだ。

ちなみに段ボールはそこら辺の木を錬金してつくりました。

「イザベラも早く入れ。ばれるぞ」

「ばれても問題ないとおもっけど…」

「いいからいいから」

イザベラが入ってきた。

「よし。では出発」

「なにをしているんだ？」

っ！！！

この声はお祖父様！

いやまて俺達はいま完全に隠れている。ばれたりなどしない。

「マルセイユ…」

「しー。ばれるいよ」

「いや、ばれてるぞ」

段ボールをはぎとられた。

「な、なぜ…?」

「気付かぬ方がおかしいだろう」

なんということでしょう（泣）

完璧だと思ったのにorz

「マルセイユの事は放っておいて…お祖父様にお話があります」

俺をおいて勝手に話しを進めるお祖父様とイザベラ。

あれ？俺いらなくね？

次の日

なんかあのあと父上が城に呼ばれて、お祖父様、叔父上、父上で話しているらしい。

ちなみに俺は帰宅した。

イザベラともう少しおしゃべりしたかったけど。

「キヤアアアアー！……！」

！？

シャルロットの声！

まさか盗賊か！？

俺の可愛い妹に手を出すとは！！ぶっ殺してやるぜ！！

俺はブレイドを発動して声のした方向にいそいだ。

そこには…

「なっ…！」

フランケン？みたいなのがいた。

「おのれフランケンめ…シャルロットから離れろ！」

「ま、マル…ゼイユ……ぼぐだどつざんだ……」

！！！！

よく見たら父上だった。

てか重症！？何があった！！

「父上！！大丈夫ですか！？」

「マルゼ…イユ…治療…じてくれ……」

「父上しつかり！…父上、父上…父上——！！！」

その後

話を聞くとどうやら話し合いの後父上と叔父上は殴り合いの喧嘩になったらしい。

お互いの本心をしてついでつかないというらしい。

とにかく殴り合いになって、お互い誤解？が解けたという仲直りした感じになったらしい。

めでたしめでたし。

…

俺なんの役にも立ってくない？

仲直り大作戦（笑）（後書き）

感想等ありましたらよろしくお願いします。

あいさつというか説得

どうもー、マルセイユです。

例の仲直り大作戦？の後何度か話し合いをして叔父上が王位を継承することになったようです。

ついに死亡フラグを回避できたよ。よかったよかった。

そしてもうひとつ良い知らせがある。

スクウェアになりました！！！！

長年俺を悩ませていた問題が解決したからかな？とにかく父上がボコボコになって帰ってきた日スクウェアになりました。

父上の怪我がほとんど精神力を消費せずに治せたからびっくりしたよ。

なににせよ父上暗殺を阻止し、スクウェアにもなったのでやりたいことがある。

なので父上にちょっとしたお願いをしにいくと思う。

「父上、お願いがある」「断る！！」「……」

え！？

ちよー！？え！？話ぐらい聞こつよー！！最近マジで息子の扱いひどい

よ!!

「父上…最後まで言わせてください」

「この間の件について僕は忘れたわけじゃないよ」

あ…

「結果的に仲直り？できたのだからいいじゃないですか」

父上は仲直り大作戦についてお祖父様から俺が計画したと聞いたらしい。

だから俺の願い事が碌なもんじゃないとも思っただろうか。

「たしかに兄さんとわかりあえたのはいいとして…もうちょっと穏便な方法があったんじゃない？」

「先程からまるで私がわるいかなのような言い方ですが…殴り合いをしたのは父上と叔父上の勝手にであって私が計画したわけではありません」

まったく…人のせいにしないでほしいな。

「ごほん！それはさておきマルセイユ。お願いとはなんだい？」

話をそらしやがった!!

だが願い事のほうが大事なので今回はいいとしよう。

「実は最近スクウェアになりました」

「なんだって！？スクウェアになった！？」

驚いてるな…

父上の12歳という記録より3年も早いんだから驚くのも無理はない。

「すごいじゃないか！！早速パーティーを開こうじゃないか！！」

ぱ、パーティーだと！？

そういえば父上がスクウェアになった時は城で盛大にパーティーをやったと聞いたが…

もしやるとしたら、パーティーの規模はしらんが叔父上は確実に来るだろう。そして叔父上の耳にその話が入った時点で凄まじい規模のパーティーになるのは間違いない。あの人は面白い事が好きだから間違いない。

しかし…

「父上。パーティーについてはとりあえずおいといて…修業の旅にでたいのですが…」

そう、やりたいことというのは修業の旅にでることだ。

「そう…いつてらっしゃい」

え！？

引き止めたりしないの！？

「と、止めないのですか？」

「止めても旅にでるのだろう？ だったら止めないさ」

確かに止められても旅にだますよ。

だけど心配ぐらいしたらどうなのよ。

「ただし条件がある」

？

「なんですか？」

「まず一つ。きちんと皆にあいさつしてから行くこと。二つ目は危険なことはあまりしないこと。それと…」

「それと？」

「ちゃんと帰ってくること」

oh…

なんか…父上の愛を感じました…

あれ?...さっきまでこんな空気じゃなかったのに...

「わかりました...」

「よろしい」

父上...なんか父上の事を初めて尊敬？しました。

「では行つてきます」

「え！？もう行くの！？パーティーは！？」

どんだけパーティーしたいねん！！さっきまでなんか感動？な空気だったのに一瞬で吹っ飛んだわ！！

「パーティーなんて別にいいじゃないですか」

「別にいいかもしれないが...あーそうだほら、旅にでるにも準備があるだろう？準備させているあいだパーティーしよう」

パーティー好きだな...

「既に準備はしてしまいました」

「いつのまに！？」

父上のところに来る前にすべて準備しておいたのだよ！

「ではとりあえず...あいさつしてきます」

「あ！ちょっと待ちなさい！マルセイユ！マルセイユー……！」

ふー。

シャルロットと母上の説得に二時間もかかりました。

シャルロットと一緒に行く……とか言い出して本当に大変だったよ。

だがこれからあいさつに行く人物はシャルロットよりも強敵だ……

イザベラにあいさつに行きます。

さて、イザベラが許可を出してくれるだろうか……多分だめだろうな……

もちろん許可が貰えなくとも旅にでるが。

プチトロワ

「というけで旅にでる許可をいただきたいのですが……」

現在俺はイザベラに土下座をして頼み込んでいる。

「ごめんなさい。マルセイユ、よく聞こえなかったわ」

や、ヤバいぞこの声！完全にキレてるぜ！

だがここで諦めるわけにはいかない俺は誠意を見せるため土下座から土下寝へと移行した。

「旅に出る許可をいグガッ！！！」

痛い痛い痛い痛い！！！！

土下寝中の人の頭を踏みつけるなんて酷いじゃないか！！

痛い！！！！

「マルセイユ。旅に出たいんですって？あなたはいつもそう。勝手な事ばかりして、少しは心配する方の身にもなってほしいわ」

まずいよ！まずいって！怒ってるとかいう次元じゃないって！キレてるよ！キレてる！

というか俺はそこまで心配させるような事はしてないぞ！他の転生オリ主の連中に比べたらな！

傭兵みたいな事をしたりとか…ロマリア相手に裏でなんかやつたりとか…全然そんな事やってないんだからね！

そんな俺がいつ心配をかけたというのだ！これほど回りに安心感を与える俺が！

「とりあえず立ちなさい」

「はい……」

ガシッ！

┐
^
?
└

何やらイザベラさんにつかまれました。

そして…

「ほいさー!!!」

「うおおおおお！?!?!?」

背負い投げ！？された。

てかヤバイ！！死ぬ！！

「グッハア!!」

痛つでえええええ！！！！

お……おもいきり……腰打った……

「ふう。スッキリした」

何がスッキリしたただよおい！！

「い、いたい…どこで…こんな技を…？」

「父上に教わったのよ」

ジョセフめ…

「くっ…！…しかしイザベラよ…俺はどんなに痛めつけられようと
も旅に出るぞ」

俺の決意はかたいのだ。

「はあ…そう言うと思ったわ。どうせ止めても無駄なんですよ？」

よくわかってるじゃないか。

「行ってもいいわ…だけど約束して」

「約束？」

「そう…必ず帰ってきて…フラツと旅に出たまま帰って来ないなんて許さないわよ」

父上と同じ事を言われてしまった…

皆俺の事本当に心配してくれてるんだね…最近扱いがあれだから気付かなかったよ。

「わかった。約束する」

イザベラへあいさつに行ったあとはお祖父様へあいさつに行った。

お祖父様のリアクションは最悪だった。

お前の奇行にはもう口を出さなかったさ。

酷いよね。

「おお！マルセイユ！！こんなところにいたのか！」

この声は叔父上だな！

探そうとしてたところだからちよつどいい。

「旅にでるらしいな」

なんだもう知っていたのか。

「ええ」

「どこに行くつもりなんだ？」

うーん…言いたくないんだよねえ…

「安心しろ。誰にも言わん」

なら教えてもいいか。

「実は…サハラの方まで行こうかと…」

「…」

「叔父上？」

どうしたんだ？

「すまん…もう一度言ってくれ」

「えっと…サハラまで行こうかと」

「エルフの住むあのサハラか？」

「はい」

「あつはっは！…！さすがマルセイユ！…！考える事が違うな！…！」

誉められてるの…か？

「止めないのですか？」

「止めても無駄だろう」

…

皆それ言うよね。

皆の中の俺っていったいどうなってんの？

「だがちゃんと帰ってこいよ。シャルルやイザベラが悲しむからな」

…！

叔父上から帰ってこいよなどと言われるとは思わなかった！

「わかりました」

その後どこに行くつもりだ？と皆に言われたが華麗にスルーした俺はサハラへと出発した。

あいさつとつか説得（後書き）

感想等よろしくお願いします。

サハラなう

おっす！おらマルセイユ！

…なんていつてる場合じゃありません！大ピンチだ！

出発後、恐らく父上あたりに護衛するよう命令されたであろう後ろからついてくるメイジを眠らせ、サハラに来たところまではいいだ
がしかし…

「いきなり竜の群れに遭遇とかマジでねえよ！！」

魚と竜を足して2で割った感じの竜に襲われてますはい…

モン○ンのドスガレ○ス的な感じのやつかな？

とにかくこいつらは砂の中泳いだり空飛んだりとかなにげに万能な
やつらだ。

地面にいたら砂の中から、飛べば上空から攻撃を受ける。

地中からの攻撃は避けにくいので空飛んでるがな、能力で。

「くそ！エア・カッター！」

空中で体当たりかましてきたやつにエア・カッターを放つ。

くそ！剥ぎ取る余裕がねえ！

なんて言ってる場合じゃねえ！

砂漠は乾燥していてまともに水か使えません。だから一番目に得意な風で對抗しているが風はまだトライアングルな為ちと厳しい。

能力使うしかないっばいなこれ…

だがその瞬間下から飛来した何かによって背中を切り裂かれた。

「アアアアア！！」

痛ってえ… たくなんだよマジ…

「…」

そこには口を開けて砂のプレスを放つ竜がいました。

マジガレ〇ス…

「うおおおおお！！」

全力で避ける。

「痛ってえええええ！！」

無理な動きをしたため怪我に響いた。

そしてその僅かな隙を見逃してくれるわけもなく、俺は地面へと叩きつけられた。

「カハアッ！」

くそう動けねえ…ここで死ぬのかな…

死ぬの…嫌だな…

「なんで生きてるんだろう？」

気が付くとベッドの上だった。

今までのおれならここで「知らない天井だ…」とお約束を呟いていたが流石に死にかけたのでふざけないでおこう。

きつと普段からそういう態度だからこんなことになったのだ。

よし、これからは少し態度を改めよう。

「にしてもなんで生きんだ？誰か助けてくれたんかな？」

「私だ」

「お前だったのか」

…！

orz

やっちまった…ついお前だったのかと返事をしてしまった…

態度改めようとか考えたばっかなのに…

あれ？てか誰？

「うおおおおお！！いつの間に！！」

「いや…ずっといたのじゃが…」

エルフのお婆さんがいました。

初の生エルフがババアかよ…

「何か失礼な事を考えなかったかの？」

「いえ、そんなことはありません」

恐れ…

「あなたが俺を助けてくれたのですか？」

「まあ…一応そうじゃな」

このエルフの婆さんはなぜ人間の俺を助けてくれたのだろうか。

「人間の俺を…なぜ助けてくれたのですか？」

「私はあまり種族の事はこだわらないんだよ。エルフは人間のことを野蛮な連中と呼ぶが人間すべてが野蛮ではないし、自分達を平和

的な種族などと呼ぶがエルフすべてが平和的なわけじゃない。どの種族にもいろんなやつがいるんじゃない、じゃから私は人間だからといって差別したりしない」

oh…めっちゃいい婆さんや…

感動したわ…

「そういうお前もエルフである私が恐くないのかい？」

「俺は会ったこともない種族を恐れたりしない」

「なるほど…そうか」

婆さんはなんかしらんけどうんうん頷いてる。

「ところでお前さん、名前は？」

「えーと…マルセイユです」

「マルセイユか…私はリーシャじゃ、よろしく」

リーシャさんね。

いやはやエルフの方と簡単知り合えたのはよかった。

最悪虚無の情報とかでなんか交渉しようかと思ったしな。

「マルセイユ、お前エルフが恐くないといったな」

「はい」

「会わせたい子がおる」

「シャーリーだ。よろしく」

美少女やああ！

俺の目の前には同年代らしきエルフの少女がいる

猫っばい目に白い肌さらさらの髪…

美少女や…さすがエルフ。

「俺はマルセイユ。よろしく」

「この子は私の曾孫じゃ、仲良くしてやってくれ」

曾孫！？婆さんいくつだよ！？

「シャーリーや、この子はそこで拾った人間の子じゃ、仲良くしてやれ」

拾ったか…まあ間違っではないだろう…もう少しオブラートに包んで言っただけだったかな。

「と言うわけでシャーリー。こいつを部屋へ案内してやれ」

「わかった」

「拾われたというのは本当か？」

「まあ…うん」

「なぜ拾われるような状況になったのだ？」

「砂のなか泳ぐ竜みたいなのに襲われた」

思い出すのも忌々しい。

「ああ…砂竜にやられたのか」

あいつら砂竜というのか…いつか倒す。

「よく生きてたな…あいつらは単体では大したことないが群れで行動する。賢く陸空海すべてで行動可能などというところでもない連中だ」

あいつら水んなかもいけんのかよ！！

「というか君はなぜサハラにいたのだ？」

ついにこの質問がきたか…

「武者修業…かな？」

「なんで疑問系なんだ」

修業しにきた初日から死にかけたからな

「まあいい…ここが君の部屋だ」

「ああ…案内ありがとう」

「どういたしまして。君、砂竜にやられて怪我したのだろう？治療しただろうが一応今日はもう寝ておけ」

「あ、はい」

シャーリーの優しさに感動。

s i d e リーシャ

部屋でくつろいでいると、そこから強い精霊の力を感じた。

外にでてみると人間の子供が怪我をして倒れておった。

それだけならそこまで驚くことではないのじゃが…

その子の周りには精霊が群がっておったのじゃ。しかもかなりの量の精霊が。

砂についた引きずったようなあとと砂の精霊達の雰囲気から、精霊たちがこの子を運んできたとは私は推測した。

私は今までの人生でこれほど驚いた事はない。エルフですらこれほど精霊に愛された者はおらぬ。

私はすぐに治療した。

治療してさらに驚いたことがある。

この子は凄まじい水の力を秘めておる。

人間の水の使い手も何度も見てきたが、これほどの力を秘めた者はいなかった。

私はこの子が嫌でなければ水の力を鍛えようと思う。

精霊の力と系統魔法の違いがあるが教えるだけなら問題ないじゃろう。

ちょうどシャーリーもそろそろ鍛えようと思っていたところじゃ。

こんな辺境に住んでいるせいであの子には友達がない。故にマルセイユがあの子の友達となりライバルとなってくれればうれしい。

よし、さっそく明日から鍛えてやるかの。

あの子たちには私のすべてを教えよう。

私の持つ『医術』そのすべてを。

サハラなう（後書き）

誤字脱字や感想などあったらよろしくお願いします。

修業開始（前書き）

今までで一番無茶苦茶な気が…なんかすみません。

修業開始

チヨリース！マルセイユです！

朝起きたらリーシャ婆さんに鍛えてやるって言われました！まさかこんなすぐにエルフの師匠ができるなんて思わなかったぜ。しかもあの婆さんはかなり高位の水の行使手らしい。マジラッキー。

「で？いったい何をやるんですか？」

俺とシャーリーの目の前には水？の入った桶が二つある。おそらくというか絶対俺ら二人分だろう。

「うむ。まずお前らは基礎の基礎からじゃ。精神力を鍛えてもらうぞ」

精神力ね…そーいや俺もトライアングルになるまでは精神力を増やすため毎日ぶっ倒れるまで魔法を使い続けたなあ…トライアングルになったあたりからなかなか気絶しなくなった為俺は結構精神力に自信があったりする。

「そんでお婆様、具体的に何をやるんだ？」

俺もそれ気になってた。

「何…簡単な事じゃ…その桶に手をつ突っ込めばいいだけじゃ」

え？それだけ？

いやいやいや…いくらなんでもそりやないだろう！？そんなんで精神力が上がるんかい！！

「もちろんこれはただの水ではないぞ。私が作った、相手の精神力を吸い取る特殊な液体じゃ」

「それが修業になるんすか？」

「なる。精神力をぶっ倒れるまで吸い取らせる。それを何度も繰り返せば精神力はあがる。それと同時に吸い取られないように抵抗してみる。抵抗することによって精神力は鍛えられる」

なるほど…確かに鍛えられそうだ。

「なら、私からいくぞ」

シャーリーが桶にてを突っ込む。

バタンッ

倒れんの速っ！！まだ指先をちよっといれただけじゃないか！！

「まあ…最初はこんなもんじゃろ…マルセイユも手をいれてみる」

これも修業だ…えいつ！

1…2…3…4…

「手を出せ」

「あ、はい」

ガシッ

頭をなんか掴まれた。

そして俺の頭を掴んだ婆さんはなにやらフムフムだとかなんと！？とか言ってる。

「お前…凄まじい精神力の量じゃのう…」

え？マジで？凄い？

「といふかなんで精神力の量とかわかるんですか？」

「そのくらい…練習すりゃ誰でもできるようになるわ」

そうですか…

「ふむ…にしてもこの量は異常じゃな…お前、死んだ事があるかの？」

「はあ！？！？」

何言っちゃってんのこの人！？いやこのエルフ！！

確かに死んだ事あるけどさ！！突然意味わかんねえわ！！

「言い方が悪かったの。怪我とかで死んだ後蘇生された経験はあるかの？」

「あの…質問を質問で返すようで悪いのですが…それが精神力となんの関係が？」

「あー…よし、精神力について最初から説明しよう」

長い話なのか姿勢を変えた婆さん。俺も話を聞く態勢に変える。

「精神力が突然あがるのはどんな時じゃ？」

突然上がる？突然上がった？…するか。

「えーと…怒りや憎しみなどの強い感情を覚えた時とか…命の危機などの極限状態に陥った時とか？」

「まあ…正解じゃな。つまりそういう事じゃ…命の危機になっただけで精神力があがるのじゃ、死を経験するのがどれだけ精神力に影響を与えるか…なんとなくわかるじゃろ？」

うん…まあ

確かに俺の精神は、死を経験している。それどころか、神に会い、世界を越えている。精神力の量が異常なのはそのせいだろうな。

「まあ…死を経験してもお前程の精神力を得る事はないじやろうが…まあいいや…となるとお前にはこの修業はいらんな」

基礎の基礎の修業が開始直後に終わってしまった…

「じゃがシャーリーと別の事を教えるのもめんどいしの…とりあえ

ず同じ事をしておけ」

「わかりました…」

どうやら本格的な修業はしばらく後っぱいな…

「安心しろ…お前の修業にもなるようにちゃんと考えておる」

さすが婆さん。

「どうするんですか？」

「この修業は本来お前らがこの液体に抵抗し精神力を吸われなくなったらやめるつもりじゃった。その時には精神力も増えてるだろうからな。しかしお前はすでにかなりの精神力を持っている。だからさらに上を目指してもらおう」

上…ね…なんかいい響きだ…

「液体に手をいれ抵抗し精神力を奪え。この液体は奪った精神力を貯めるから、最初のうちに奪われた精神力を取り返したらお前の修業は終了じゃ」

「わかりました」

すると婆さんがなぜかニヤリと邪悪な笑みを浮かべた。

「この修業が終わったら…お前はもう精神力切れなんて物を気にしなくてすむぞ」

「え!？」

「さらに精神力が増えるというものもあるが…お前は無くなったら他人から奪えばいいのだからな」

!!!

「人からも奪えるのですか!？」

「なんじゃこの液体からしか奪えないとでも思ったのか？抵抗する術を持たぬ者からなら奪えるぞ」

マジでか!!最強じゃねえか!!

「さて、私は部屋で寝るとするかの…後は自分で練習しておけ。それとシャーリーのやつをソファの上に寝かせてやってくれ。いつまでも放置は可哀想だからの」

やべえ…シャーリーの事完全に忘れてたぜ。まあ気絶してるからばれないよね。

てか寝るの早い。起きたばっかじゃね？二度寝かなんか？

「ああ後…」

「?…なんですか？」

「敬語はやめろ。堅苦しい」

シャーリーをソファに寝かせた俺は桶に向かい合っている。

「よし！…さっさと修業終わらせ」「うっさいわ！…！」グゲハ
アッ！…！」

後頭部に衝撃なう。

だ…誰だ…俺の…決意表明を邪魔しやがったのは…

「私だ」

「お、お前…だっのか」

くそう…思わず反応してしまうこの口が恨めしい…

「いつ…のまに起きたんだ？」

「お前が大声を出してくれたおかげで目がさめた。ありがとう」

…どうやらシャーリーは寝起きの機嫌が最悪らしい…覚えておこう。

ガシッ

今日はやけに頭を捕まれる日だな…シャーリーは髪を掴んでいるが…

俺はシャーリーによって顔を液体のすれすれまでもつていかれる。

「何か言い残す事はあるか」

「っ！！それでも地球は回っている！！！」

俺は液体の中に顔を突っ込まれた。息ができないうえに精神力も吸われる。徐々に意識が遠退くなかで思った事は一つ。

これからは絶対にシャーリーの眠りを妨げてはいけない…

修業開始（後書き）

感想等あったらお願いします。

契約（前書き）

毎回話の長さが違うorz
すみません。

契約

ちわっす！マルセイユっす！

修業を初めて三週間…なんと風もスクウェアになりました！！！！

それでめっちゃ喜んで騒いでいたらシャーリーの睡眠を邪魔してしまつたらしく、よくわからん関節技をかけられた…とても痛かった。

だが美少女と密着できたのだ！故に反省もしていなければ後悔もしていない！！

そして風がスクウェアになった事以外にもお知らせがある。

修業が上手くいけません（泣）

奪うどころか耐えられる時間すらのびていません。シャーリーは手を全部液体につけて五秒耐えられるようになったのに！！なぜ俺には進歩がないのだ！！

精神力は上がっているのだろう！！スクウェアになったしな！！だがしかし！！奪うまでできなきや意味がないのだ！！

「というわけでお二人の知恵を貸していただきたく…」

原因解明のために婆さんとシャーリーを頼ることにした。

単純に才能が無いとかだつたら泣くぜ…

「そんなもの才能がないだけだろ」

グサアツ!!

…なんてな、そう言うと思ってたぜシャーリィ。

「ふむお前ならすぐに出来ると思ったんじゃないか。見込み違いじゃったか」

なん…だと…？

婆さんが言うなら間違いない…

まさかの才能がない…orz

「そ、そう落ち込むなマルセイユ！まだはじめたばかりじゃないか！」

「そ、そうじゃ！まだ希望はある…！」

ハア…

「そ、そうじゃ！一つ考えられる可能性があるぞ！だからそう落ち込むな！」

む！

「可能性とはなんでしょう？」

「精神力を使うのはどんな時じゃ？」

？

「そりゃ魔法を使う時だよ」

「そうじゃな」

何を当たり前の事きいてんだ婆さん。

「ならマルセイユ、お前はいつも何を持って魔法をつかっている？」

「そりゃあ…杖を持って…ハッ！」

「気づいたようじゃの。そうじゃ、杖じゃ」

ま、まさか杖なしでは精神力をともに扱えないというのか！？

確かになんかそんな感じがしなくもないが…

「なら杖を持つて修業すれば…「ならん！」なんで？」

「もし杖がない状況に陥ったらどうする！杖を奪われたらどうする！」

確かにそうだけど…それじゃあ修業進まないじゃん！

「ならどうすれば…？」

「自分で考える」

うー…婆さんひどい…

その晩俺が部屋でどうすればいいか考えているとシャーリーが入ってきた。

「ふむ…やっぱり悩んでいるな」

「そりゃそうだろう、何とかしないと修業進まないし…」

「お前はすでにかかなりの精神力があるのだからいいだろう！私が修業を終えたらお前の修業がどんな状況であろうと次の修業に進んでくれる。そう思い詰める必要はないんじゃないか？」

まあ…多分そうだろうけど…でもやっぱりやるからには出来るようになりたいじゃないか！

「魔法の行使に杖が必要だなんて…人間の魔法は不便だな」

「その意見には全面的に同意する」

考えて見ると系統魔法って結構不便だよなー、杖との契約必要だし…使える系統が人によって違うし…杖が無きゃ魔法使えないし…

あーあ…せめて杖なしでよければいいのに…

「それでマルセイユ、何かいい案は思い付いたか？」

「いやまったく」

だから悩んでいるのだよ、シャーリー。

「そうか…ところで一つ思ったのだが…」

「なんだ？」

「婆様は杖がなかったり奪われたらどうすると言っていただろう？
なら杖を体内に仕込むなりして常に身に付けていられるうえに奪われる事も無いようにしたらどうだ？」

ああ…それは俺も考えたよ。でも体内に杖を仕込むなんてやりたくないわ！！絶対嫌だ！！

「シャーリー…君だったら体内に杖を仕込むかね？」

「そんなことするわけないだろう」

だろ？普通やんねえってそんな事。元素の兄弟とかなら喜んでやりそうだが…

そういえば連中…先住魔法…つまり精霊の力で肉体を強化してるんだっけ？俺も今度やってもらおうかな？婆さんなら出来る気がする。

「じゃあ…肉体を杖として扱えないか？」

それは…すごい発想だ…だがかし…

「それは多分無理なんじゃないか？」

そんな事ができるなら皆やって…

「ああ——————！！！！」

「っ！！！！なんだ！ビックリしたじゃないか！」

「いや…すまん…だが肉体を杖とする方法が思い付いた」

「なんだと！？」

この方法なら…もしかしたら…

「というわけで協力してください」

今俺は肉体との杖契約のため婆さんに協力を求めている。

これが成功すれば俺は杖を持たずに魔法が使える！！そして…もう一つのアレ…も成功してくれたら…もはや無敵じゃないか？

アレについては後々判明するぞ！

「別に構わんが…にしても肉体を杖にするなどよく思い付いたの」

「思い付いたのはシャーリーなんですけどね」

婆さん自分で考えろって言うてたからなー、怒ってたりしないよね

！
…

…

よし…怒ってないようだ。

「それで？私は何をすればいいのじゃ？」

よっし！協力してくれるらしい！

「では…俺を殺してください」

肉体を杖にする方法について説明しよう。

まずは全精神力で偏在を作り出す。本体が死んでもその精神力分動いていられるように。

そして俺が死んだ後婆さんが後で蘇生できるようその状態で保存？固定？まあよくわからん魔法を使う。

そして偏在の俺が本体の俺と契約する。

さて、ここで皆が持っている疑問を解決しよう。

まずはなぜ偏在で契約できるのか…それは契約というのは精神的なものなので偏在が行っても問題ないはずなのだ。今までやったやつがないから多分だけど。

わかったか!!

次に死んだだけで契約できるのか…これは説明が長くなるかもな…

本来生き物とは契約できない。だが皆が契約している杖…つまり木は生き物じゃないのか？なかには金属製の杖のやつもいるが。

地面から生えている木と契約することはできない。だが折った枝やひっこ抜いた木となら契約が可能だ。折られた枝はすでに生き物と認識されない。ひっこ抜いた枝も地面から養分を吸えないため死んだも同じつまり生き物ではない。

つまり死んだ人間は生き物ではないから契約ができるはずなのである。多分。

わかったかね？

…

説明疲れた。

というわけで始めるぜ！

「ユビキタス・デル・ウィンデー!!!」

side 偏在マルセイユ

本体が全精神力を使い俺を作ったため気絶した。

痛みを感じないで死ぬるからよかった。と本体も思ってるよねきつと。

「では始めてくれ」

婆さんが何やらぶつぶつ唱え本体の胸に手を当てる。

バチンッ!!!!!!

「ば、婆さん！本体に何をしたんだ！？」

「うつさいわ！電気を流して心臓を停止させただけじゃ！！」

だけって…十分やばいわ！！頼んだの俺だけだな！！

「よし…死んですぐの状態にとどめた。これなら何年たつても蘇生できるぞ」

さすが婆さん。

では契約だ。過去に一度契約はしてるし、自分の肉体だからそこま
で時間はかかないだろう。

三時間後

多分契約完了だ…かなり早く終わったな。

「マルセイユ、試しに魔法を使って見るのじゃ」

よし…じゃあここはライトあたりをやてみるか…

「ライト」

すると頭の辺りが光った。

…

成功したのにうれしくねえ！！自分の頭が光ってるの見ても恥ずか
しいだけだわ！！

「わはははは！！！！ま、マルセイユ！！！！なんだそれは！！！！ふは
ははは！！！！」

いつのまにいたのかシャーリーが笑い転げてる。

ちくしょー！馬鹿笑いしやがつて！！

一発叩き込んでやりたいがそんなことすれば消される。ちくしょー！

「あは…あはは…ひー…ひー」

バタンツ！

倒れた！？

ま、まさか笑いすぎで気絶したとでも言うのか…！

「なんてやつだ…！」

笑いすぎで気絶とか…ありえねえ…もはや人間じゃねえよ…！！…あ
っ！エルフだったね。

「そろそろ蘇生するぞ」

「あ、ちよつと待って」

まだやることがある。

「両腕の肘から指先の骨を取り出してくれない？」

「何をするつもりじゃ？」

「契約です」

俺が今からやろうとしているのは杖との重複契約と呼ばれるものだ。これは一つの杖と複数回契約することで魔法の威力を高める技術だ。本来一つの杖と複数回契約するなど不可能だ。トリステイン王家に伝わる杖など、中には可能なものも存在するが。

だが裏技が存在するのだ！！

俺が昔ガリアの王立図書館で見つけた裏技なのだが、まず杖と契約する。その後杖を二つに折る。すると片方は魔法が使えるが、片方は使えない。それで使えない方の杖と契約し、鍊金などで二つを一つに戻す。これで完了だ。

だがこの裏技には大きな問題が存在する。それは杖と複数回契約するのがとても難しい事だからだ。基本一本が限界らしい。

しかし！中には複数回契約可能な人間もいる。例えば父上なんか四つの杖と契約している。子供の時の杖と先祖伝来の杖と現在の杖と予備の杖だ。

つまり！息子である俺も複数回契約可能なはずだ！！実際さっき二つ目の杖と契約したしな！！

ゴホンッ！

複数回契約の難しさは置いといてと…

俺はその重複契約を肉体で行おうとしているのだ…

肉体と契約後、肉体から骨を取り出し契約、そして治す。やってる

ことは普通の杖の場合と大して変わらないから成功するはずだ。

「マルセイユ、取り出したぞ」

oh…グロい。

そんなことは気にせず契約だぜ！

sideマルセイユ（本体）

パチリ

目が覚めた。

痛い所もないし、無事蘇生されたっぽい。

キョロキョロ

床に倒れたシャーリー発見。何があつた…

「目が覚めたかの？」

婆さん登場。

「成功…したの？」

「恐らく成功したじやろ。試してみたらどうだ？」

うむ。そうだな、試すか。

やるのは…ブレイドにしとか。他のは回りに被害がでるし。

そして重複契約が成功していた場合威力がどうなるか不明なため手加減することしよう。

「スーハー…よし、やるぞ！ブレイド！」

すると俺の腕の二倍の太さと長さ位のブレイドができた。

ぱ、パネエ…手加減してこの威力…死んだ甲斐があつたぜ…

「婆さんや…成功したみたいじゃぞ？」

「なんじゃ爺さんみてえな口調になりおって…まあ成功してよかったな」

「うん」

成功か…ふへへ…成功しちゃったよ。

ニヤニヤ

ヤバイ、超嬉しい…これ程嬉しかったことは転生させてもらつ時以来だな…

「よつしやああああ！！成功したぞおおお！！！」

あはははは！！！！これが笑わずにいられるか！！！！これで俺はハルケギニア最強の杖を手に入れたぞ！！！！

「うるさいぞ…マルセイユ…！」

ビクウツ！！

この状況…ま、まさか…

恐る恐る後ろを見るとシャーリーが起き上がっていた。

またやってしまった…このままではヤバい！！

「ま、待つんだシャーリー…俺はこのまま毎話最後にお前にボコられる

なんて事にはしたくない…ここで負の連鎖を断ち切るんだ…！」

おれはそんなの嫌だぜ！

「何を…訳のわからない事を言っている…」

「ま、待て！話せば分かる！」

「問答無用！死ね！」

ああ…これほどまで犬養毅の気持ちになれた事はない…シャーリーが助走をつけ俺に向かって飛び蹴りをしようとしているのを見ながら思った。

もちろん今回の事も反省していなければ、後悔もしていない。なぜなら蹴りを顔面にくらうつ前、シャーリーのスカートの中を見れたからだ。

今生に悔いなし…！

契約（後書き）

杖についてかつてに設定作っちゃいました。説明わかりづらかったらすみません。

感想等ありましたらよろしくおねがいします。

NEGOTIATOR……ではない（前書き）

完全スランポーズ

でも強引に書いてしまった……

NEGOTIATOR……ではない

やあ。マルセイユだ。

例の杖の件から約一ヶ月がたち、俺もシャーリーも修業を完成させた。

そして俺達は現在婆さんに別々の事を教わっている。まあ俺は系統魔法の使い手だしね。婆さん前に別々に教えんの面倒とか言ってた気がするけど、結局別々に教える事になっちゃったね。

そんなわけでシャーリーは系統魔法で言うところのヒーリングを修業中？である。俺はすでにヒーリングをマスターしているためやらなくていいってさ。

だから俺が教わってるのは治療とかそういったのに関わるのをやっている。婆さんが実践し、俺が系統魔法にアレンジ、それに婆さんがアドバイスと、やっているのはこんな感じかな。

てかなんで系統魔法のアドバイスでkindだよ…まあ細かいことは気にしたら負けだな！

それ以外になんと外科学などを教わっている。

最近、どっから入手したかしらんがスキルニルを婆さんが持ってたため、自分にメスを入れるという奇跡体験をしてしまった。

というか未熟な俺にメスを持たせるとか間違ってるよ！もっと修業積んでからにさせてくれ！！

それ以外に新しい魔法の開発とかもやっている。

まあ…新しいというか念力の応用なんだけど…

念力つてのは大抵窓を開けるとかにしか使わない。でも他にいろんな使い方あんじゃね？と思った俺は色々試してみたのである。

まず一つ目は念力で光に干渉。これが案外上手くいった。練習しただけでは光を操作して姿を隠したりとか出来そうだな。

次が空間に干渉。これが難しい。これが出来れば虚無の世界扉とかゲートとか出来そうなのに…一度試してみたが空間をねじ曲げただけなうえに座標指定をミスしたらしく某忍者マンガにでてくる畑に設置されてそんな感じの名前の忍者に芸術は爆発だな忍者が腕をやられた時の再現をしてしまった。水メイジでよかった…！

ゲートに関してはこれから修業が必要だな。腕は治ったし、カ○シの神威らしき技も再現可能っぽいからめでたしめでたしだね。

最後に時間への干渉。これが完璧になったら多分加速が使えるよね、あれまわりの時間を遅くして自分はいつも通りに動ける魔法っぽいし。これも修業が必要だね。エルフが作った魔法で動いていない時計にこれをやって修業中です。

とまあ長々と説明したがこれが最近の俺がやってる修業とかである。

「修業ははかどつとるか？」

いつもの用に庭（といってもどこまでが庭か不明）で修業をしていると婆さんに話しかけられた。

なんだかんだで気にかけてくれる…いい人だな…マルセイユ感激！！
なんてね。

「微妙」

まあ婆さんがどんなにいい人でも微妙なものは微妙なのだ！まったく上手くいつとらんよ！

「そうか…なら一つ提案があるのじゃが…」

「何？」

「精霊の力やら系統魔法やら、とにかく色々調べとる機関があるのじゃが行ってみるか？参考になるかもしれん」

アカデミーみたいなもんか…

「でも俺人間だぜ？無理じゃない？」

「いや…なんとかする」

ニヤリとしながら婆さんが言った。一体何を企んでやがる…

「ネフテスの首都アディールに行って評議会の連中の許可を貰う」

「いやいやいや！！無理だつて！！俺人間だから！！エルフの皆さんが嫌う蛮人だから！！許可とか無理だつて！！」

無理ゲーだよ！！

「大丈夫じゃ、いいから行くぞ」

ああ…もう俺死んだ…絶対死んだつて…

てなわけでアディールに向け、風竜に乗り飛行中です…

ちなみにシャーリーはお留守番。安全のため俺の偏在も一人シャーリーについてます。

てか婆さんが偏在おいてきやいいのになんで俺なんだよ…と思って聞いたところ…

「アディールで何が起こるかわからんからの、力は温存せねば」

と、ありがたいお言葉をいただいた。やっぱ危険なんじゃん（泣）

ふう…もう悩んでもしかたがないな、婆さんに任せよう。

気分転換に遠見を使い下を見る。

「なっ…！婆さん！あれはなんだ！」

どっからどう見てもディ○ブロスじゃねーか…！どうしてこんなところに…！

「ん？あああいつは角竜じゃ」

遠見ばっぴ魔法を使い婆さんがそう言った。

角竜か…まあこういう偶然もあるだろう…

そんな感じでモノ○ロスみたいなの（一角竜らしい）やガノ○トス的な（魚竜らしい）のを見かけた。

……この世界モン○ンでも混じってんのか？ちょっとG級ハンター
の血が騒ぐんだけど。

こんど一狩りしてこようかな。

「おい、そろそろ着くぞ」

oh…死刑囚の気持ちがわかるorz

「ほれ、ふざけとらんでこれを被れ」

ふざけとらんわ！

「はいはいわかった被るのね？わかったよ…って」

なん……だと……

だ、ダンボールじゃねーか！こいつあ某傭兵じゃなきゃ使いこなせねー代物だぜ！既に体験済みだ！

「こんなんでどうしろと？」

「中にあるスイッチを押すと変化の応用でまわりの色と同化するマジックアイテムじゃ。手紙を送ってあるが一応被つとけ」

マジックアイテムだったのか…安心だ。

てか手紙出したなら手紙で話つけてくれりゃいいのに…まあ自分の事だしいいか…

ガサゴソ

被った。

スイッチオン。

評議会の連中の視線が痛いマルセイユ君です。

ここまでは例のアイテムのおかげで絡まれたりせずにとれたけどこっからはヤバイな…

短い人生だったな…

なにやら評議会の連中と婆さんが言い争ってるがもう無視だ。現実逃避だ。某芸人の如く右から左に受け流してやんよ。

するとなにやら風の刃が飛んできたが目の前で霧散した。

はは！ざまあ！！こっちにや精霊を無条件で従える能力があんだよ！俺に精霊の力は効かねえよ！

…

能力あったんだああ！忘れてたああ！ビビる必要無かったorz

こうなったら俺のもんだ！交渉モードオン！

「精神力の無駄じゃ、やめておけ。こいつは人間じゃがエルフより精霊に愛されておる」

「手紙に書かれていた事は本当…という事じゃな？」

あれがテュリユークか…ただのじじいにしか見えん…

「えーと…名前は？」

ふむ…名前を聞かれるとは思わなかった。蛮人扱いだし。

「マルセイユです」

「マルセイユ君、君の力はどのくらいの事ができるのじゃ？」

「そうですね…スペル、精神力の消費なしでの精霊の力の行使、それと精霊との契約の解除ですかね」

「嘘だ！！蛮人にそんな事ができるものか！！」

脇役っぽいエルフがいった。

しかたない実演するかね。

ゴオツって感じで空気を手のひらに圧縮して見せた。

「なるほど…確かにそれは精霊の力じゃ…では契約も解除してみてくれんかの？わしは現在、この部屋の精霊と契約しておる」

精霊にあいつに従うな！って念を送った。

…

成功っぽいね。

「はあ…どうやら全て本当らしいの…しかもこの感じだとわしは精霊の力を使用不可にされたようじゃの…困ったもんじゃ」

ガチで困った顔をしながらテュリユークはなにやら考えている。変

な事企んでないといいけど。

「よし。手紙に書かれていた条件を飲もう」

なに？まったく聞いてないんですけど。

「君にアディールにある図書館と研究機関への立ち入りを許可する。そしてネフテスに滞在を許可しよう」

マジで！？よっしゃ

「ただし、条件がある」

ですよねー。まあ普通条件つけるよね。

「我々に対して敵対しない事じゃ」

「我々に加勢しろ！とかじゃないんですか？」

正直そつちを覚悟していたよ。

「そうすると…君は同族と敵対することになるかもしれんぞ？」

別にいいけど。

「では加勢するかは保留でいいですか？」

「君がそれでいいなら」

俺的には別に加勢してもいいんだけどね。ガリアも…恐らく叔父上

もロマリアにつくよりエルフにつくだろう。ガリアの民を納得させるのは難しいだろうが何とか頑張るしかない。

にしてもこんなすんなり交渉が上手くいくとはね。思ってもみなかったよ。

その後、議会の連中も俺の能力を恐れたらしく、すぐにOKした。

まあ、精霊の力を使用不可にされるなんて悪夢だもんね。そんな事されたら自分達が馬鹿にしている蛮人たちにすら敵わなくなっちゃうんだから。

で、俺はいまアディール最大の広場の一番目立つところにたっている。

理由はネフテスに滞在することなどを国民に説明するため。そこで納得しないだろうから能力をみせる。

お、テュリユークの説明が終わった。

いっぱい野次が飛んでくるぜ。

……幻聴だろうか？イケメン爆発しろ！などと聞こえてくるのだが…

キョロキョロ

あ、あの集団か…ふむエルフにしては微妙な顔だな…

「イケメン爆発しろ！」

「氏ね！」

……あいつら本当にエルフか？

「テュリユークさん、あの方達は…」

「あいつらは…爆破部隊の連中じゃ。腕は確かなのじゃが性格に問題のある連中ばかりなのじゃよ…というか名前教えたって？」

「ば、婆さ…じゃなくてリーシャさんに聞きました」

「そうか…名乗らんですまんかったの」

「いえ…」

危ね。原作知識ですなんて言えねえよ。

てか爆破部隊ってなんだよ！？めっちゃくちゃ怖いんですけど…！

爆破されたらやだな…

「マルセイユ君。そろそろやってくれ」

よし。

ここら一帯の精霊にエルフに従わんよう念を送った。

「さて、皆さん。テュリユーク殿の言葉が信じられないのであればご自分で試して下さい」

精霊の力が使用できない事に気付いたらしいな…皆顔色が悪いぜ。

爆破部隊の連中は俺に攻撃しようとしたができず、完全にorzの態勢になってる。なんなんだやつらは……

まあ、なんにせよこれで皆納得してくれたかな？少なくともこちらに危害は加えてこないだろう。

……一応爆破部隊の連中にだけは気を付けておこう。

NEGOTIATOR……ではない（後書き）

スランプなのに強引に書いてすみませんm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8207t/>

オルレアン家の天災

2011年7月23日00時12分発行